

教 仁 名 聞

第90号
(発行日)
2018年3月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

共にましますアミダ

Aさんから「重度の障害をもつ子の親で、自分の子を見捨てているような親がいます。あなたがそんな親にどう声をかけますか」と問われま

した。その時、日頃そういう場面に直面することのない私には言葉が見つかりません。ただ、私もその親と同じような心をもっているのだろうと感じたのでした。

「自分にとって役に立たない、大きな負担になる、自分の幸せに邪魔になる」そういう我が子を心理的に見捨ててしまっている場合は希とはいえないでしょう。そして時には子を見捨てて犯罪にまで及ぶこともあるようです。

そして、そういうような子を見捨てる心は、傍観しているような私たちにも悲しいかな同じようにあるのではないのでしょうか。

自分の都合の良いことをひたすら求め、都合の悪いことを避けてばかりいて、常に自分の楽を求めて止まない凡夫の自我の心は、自分の子供さ

えも都合が悪ければ拒絶しかねないので。

ただそういう罪深い心や態度を「罪」と感じ、「浅ましい心」を浅ましいと感じるのは、人間の良心でありましょう。それはことに聖賢の教え、身近には仏の教えによって知らされるのでありましょう。

逆に言えば、自分のそういう悪しき心が我が心の中にあるのを知らず、慚愧も懺悔もないままであったり、かえって他者を批判していることも当然ありましょう。

仏教の教えにであって、我執我愛の根性がはびこっている自分であり、それゆえに「罪深く浅ましい自分だ」と知らされるのではないのでしょうか。もし教法にあわなかったら、自分の心の奥に潜んでいる自我愛の深さには気づきにくいと思われま

す。であれば、障害者の子を持つ親で自分の子供を心で見捨てている親がいたとしても、それを責める気にはなれないし、ただ悲しいことだと思

のです。

そこで

「そ

う親にどう声をかけますか」と尋ねられても、「こう答えます」というような適切な言葉は浮かびません。

ただそんな中でふつと南無阿彌陀仏とお念仏が申されてくる。そこに、そういうやりきれない自己中心の心を抱えている私たちを大悲して下さっているお方がましますということ。南無阿彌陀仏と私たちに声をかけて下さっているということ、それを知らされます。

見捨てられたような子にも、子を見捨てるような親にも、またその親と同じ心を持って

いる私たちにも、ともに等しく南無阿彌陀仏と喚びかけて下さっている。そのお声が口から耳へ南無阿彌陀仏と現れて下さるのです。

アミダ仏は南無阿彌陀仏の言葉となつて私たちに「我、汝らとともにいる」と喚びか

けて下さっています。それを聞く私たちは「アミダ仏は私たちとともにいて下さる」とことを知らされます。

アミダ仏は大悲ある量りなきいのちであり光であつて、そのいのちは万物を貫き、個々の人を貫き、私も人もそのなかにいることをほのかながらも知らせて下さいます。

「アミダ仏は私たち万人とともにまします」と言うことを聞かされ「私にはほのかにしか感じられないけれども、それが本当なのだなあ」と教えられるのです。

私たちは個々別々のいのちではなくて大きな量りなき大悲のいのちの中にあるのだという

こと、それを肯定せざるをえないのです。たとえかすかにしか感じられなくても。

煩惱が深く、自分と他者

《 念 佛 寺 永 代 経 法 要 》

四月二十二日 (日)

午後二時始

法話 西川 和榮 先生

* 同日 (四月二十二日) 午前十時・勤行法話 (念佛寺住職の法話です)

の間に溝を作り、人を、行いの善悪や能力の有無、体や形の美醜、財産の有る無し、いわんや学歴や家柄、などの違いによって人を見てしまい評価してしまいます。

人それぞれの違いにとらわれて、全ての人に働いている大悲のいのちに目が塞がれてしまうのです。違いをこえた平等な大悲のいのちに気づかないのです。平等ないのちをほのかに知らされても、人それぞれの形にとらわれてしま

う、それほど煩惱が深いのでしょうか。このゆえに差別の多い社会を作ってしまったのではないのでしょうか。

しかるに、差別的にしか他者を見ていない私たちにもかかわらず、そうした煩惱にさまたげられずに、アミダ仏は私たちと共にいて下さる。大いなる大悲のいのちの中に私たちはおかれていて、それが極めて大事な事だということ

を教えられ肯定せざるを得ません。その大いなるまことが一声の南無阿弥陀仏にご自身を露わにして下さっているのです。

がともについて下さり、その大悲のいのちのが南無阿弥陀仏と声をかけて下さっています。そしてそういう親に対して、

実際には声をかけられなくても、「あなたにもお子さんにも大悲のアミダ仏はまします、南無阿弥陀仏と喚びかけてまします。抱いて下さっている」ということを、自分にも人にも知りたいし知ってほしいと思います。

若い頃、大分県臼杵市の善法寺に佐々木蓮磨師をお訪ねし、お膝元に二ヶ月余り居らせて頂きました。ある時、師が机の上にあるリンゴを指さして、「じつと見るようにして

いる」と言われました。それが何を意味するのか、よく分からないうちに、今にして思えば、リンゴという「個物」に、目に見えない大きな不可思議ないのちが躍動している、そのいのちを感じようとしておられたのだと思います。芭蕉の有名な句に「ふとみれば はずなはなさく 垣根かな」というのがありますが、これも同じく不可思議ないのちの働き、輝きを感じた一句であると思います。

この不可思議なはかりなき

いのちはただ外にあるのではなく、それを見ている自己自身にも貫徹しているのでありましょう。

リンゴとナズナとは表面の色も形も違いますが、一つの大なるいのちの働きの貫いているのでしよう。それは人間に対して同じであって、人の姿形はみな違いますが、同じいのちが働いておりましよう。

ただ（静物）ではなく身近な人に対してこうした平等ないのちを感じるものが非常に難しいと思うのは、どうしても好き嫌いや人の美醜やその人の態度などにとらわれてしま

って目が塞がれてしまうからではないでしょうか。個々別々の実体感覚や差別感情にひっかかってしまうのです。そういう困難を破って少しずつでも「いのちの平等感」「大いなる大悲のいのちにとともに生きていくという実感」に導いて下さるはたらきがあるとすれば、お念仏として現れて下さるアミダ仏であり、アミダ仏との交わりをより深くさせて頂くほかには無いように思います。

（了）

弥陀の浄土に帰しぬれば

（和讃問答）

でありましょう」

弥陀の浄土に帰しぬれば

すなわち諸仏に帰するなり

一心をもちて一仏を

ほむるは無碍人をほむるなり

（浄土和讃）

現代語訳（あらゆる仏のさと

りは平等であり、一仏即ち一切仏であるから、弥陀に帰するの

のは即ち諸仏に帰するのであり、他力の一心を以て弥陀

一仏を讃歎するのは、同時に諸仏を讃歎するのである。）

名畑応順師訳

N「弥陀の浄土に帰しぬれば」とは

D「まず弥陀はアミダ仏、浄土はアミダ仏の浄土のことです

が、アミダ仏とその浄土は、寿命無量・光明無量のお働き

を表されたものです。このお働きを主体的に表されたのがアミダ仏、場所的に表されたのがアミダの浄土といえま

しょうから、弥陀の浄土とは、いのち（寿命）と光（光明）の無量なるお働き（アミダ）

N「（帰しぬれば）とは」

D「アミダにであいい、アミダを全人生のより処にし、死して帰る領域とさせていただくことでありましよう」

N「そのことが、（諸仏に帰する）ことにもなるのだといわれるのですね」

D「ええそうです」

N「諸仏とは」

D「諸仏ということに関してはいろいろな理解があります。今は私は、もろもろの仏とい

われる仏とは普遍的なアミダの真実に触れたお方たち、あるいはアミダに目覚めたお方

たちのことであると、ここでは理解したいと思えます」

N「たとえば、どういうお方ですか」

D「十方世界に諸仏はおられますが、そういうのもなかなか実感しにくいので、仏教の歴史の中で申しますと、諸仏として身近で著名なお方

では、まずお釈迦様、龍樹菩薩、世親菩薩、その他、大小

の覚りを開かれたお方と言え

信心夜話

時々、「仏法聞く気の無かつ

た者が掌を合わせ、お寺に参るようになり、お念仏を申すようになり、仏法を聞く身にお育て下さった。これ本願力のおかげである。この本願力が浄土に生まれさせて下さるのである」とか、あるいは

「心臓が何十年も動いて下さる。血液が流れて下さる。息が出来る。これ他力である」

などとよくお聞き下さる。そのお話自体はその通りであります。ただ、それは信心からの味わいとしては結構ですが、このように受け取ることに信心そのものであるかという、それはどうであろうか。なおそこにそういう解釈というか、知的理解というか、もしそれに留まっているとするなら、それは要するに「思い」「ハカライ」に過ぎない。

これが単なる「思い」ではなくて、眞実他力にであって、その上の味わいなら、それは結構なことだと思ふ。聖人も「たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」（教巻）と仰せられてゐる。行信の上から、

ここまでお育て下さった如来

ましよう。法然聖人や親鸞聖

人も私たちから云うと諸仏であります。あるいは弘法大師や道元禪師なども諸仏といえるでしょう」

N 「仏教の方々だけでですか」

D 「そうではないと思います。

有名な人ではイエスやソクラテスや孔子や老子、シャンカラなども入りましょう。西洋

の優れた思想家や宗教家なども入れてよいのではないでしょう

か。その他いわゆるアミダに触れたお方は名もなき人を含めるともつともつと多

くなりましょう。宗教家や哲学者だけでなく、外にたくさ

んおられると伺います。アミダに触れたお方は過去にも現

在にもたくさんおられましたよ

うし未来にもたくさん出現されるでしょうから、無数とい

つてもいいと思います」

N 「なぜアミダに触れると諸仏といつていいのですか」

D 「諸仏はそのような普遍的な眞実の働きにであつたお方

であり、であつた眞実を仏教ではアミダ仏とか大日如来と

か（空）とかと表現されますが、他の宗教や思想では神とかブラフマンとか（道）とか、

さまざまに名づけられて呼ばれるのでしよう」

れた人が同じようにアミダを

表されたのでしようか」

D 「表し方はそれぞれ違いま

しょうし、またアミダに触れる深さによつても違い、また

その人の性質や時代や環境の違いによつても表し方は違

うと思ひます。それで色々な思想や宗教となつていったのだ

と伺ひます」

N 「ではアミダに帰すると諸

仏に帰する、というのは」

D 「ですから、アミダという普遍的で不変的な眞実に帰依

するということは諸仏が触れて帰した眞実に帰することに

も自ずとなりましょう。ですからアミダに帰依することは

諸仏に帰依することに自ずから連なるのではないでし

ょうか。親鸞聖人はアミダ仏に帰依され、同時に釈尊や七高僧

や聖徳太子などの諸仏に帰依なさいました。そして広く伺

うと浄土の祖師方以外の無数の聖者や賢者が入り、その方

たちの目覚めた眞実とその教えを敬うことになりました。う

それを（諸仏に帰する）と受け取ることができるとはな

いでしょうか」

N 「では（一心をもちて一仏をほむるは無碍人をほむるな

り）の（一心をもちて一仏を

ほむる）とは」

D 「一心とはアミダの本願を信じる信心です。アミダ仏の

仰せを聞いて（ああ有難い、アミダ様なればこそ）という

信心はアミダ仏のお助けをおのずとほめたたえることにな

りましょう。南無阿弥陀仏とお念仏申すことがすアミダ仏

をほめたたえている行いともいわれるのです」

N 「南無阿弥陀仏を称え、南無阿弥陀仏を聞いて、（ああ有

難い）とお念仏申していることがアミダ仏のお働きをほめたたえていることになつて

いるのですね」

D 「ええそうです。称名念仏は讚歎行だと云われているの

です」

N 「そのことが（無碍人をほむるなり）とは」

D 「無碍人とはこの諸仏のことです。無碍人とは仏

を讚える言葉ですから」

N 「アミダ仏のお徳をほめることは諸仏をほめることにな

るのでしようか」

D 「実際、南無阿弥陀仏のお助けを（ああ有難い、尊い）

とほめたたえることは、その普遍的な眞実であるアミダ（無

量なるいのちと光）にふれ

めたたえることですから、その眞実に触れて説かれるも

ろの仏さまたち（無碍人）のお徳を（尊い）とほめ讚えることになると言えましよう」

N 「それをもう少し具体的ににおつしやつて下さい」

D 「身近に申しますと、南無阿弥陀仏と称えてアミダ仏の

お徳を讚えることは、それに目覚め、それを説かれたお釈

迦様とか七高僧とか親鸞聖人の御恩やお徳を（有難い）と

感ぜずにはおれず、有難いと讚えずにはおれません。それ

をもつと広い立場で何うなら、れ、それを表現して下さった

ことによつて、私たちも眞実へと促され、育てられ、アミ

ダに帰すことが出来たことを思えば、信心の智慧に於て世

の聖賢たちを諸仏と仰がざるを得ないでし

ょう」

N 「諸仏によつて普遍的な眞実の表し方が違ふということ

ですが、その点はどうなのでしょう

か」

D 「ええ、それは（いかにして私は眞実にふれることがで

きるか）に関わる非常に大事な事柄であつて、私は何を選

ぶかということには地に足を付けてよく考えねばなりません」

（了）

の御恩を慶ばしていただくのである。けれども、それはどこまでも「行信を獲^えば」なのである。念仏(行)の信心を頂いての上の感懐なのである。

南無阿弥陀仏はそのまま「助ける」「引き受ける」の如来法蔵様ご自身の仰せであり、誓願不思議であり、大悲そのものであります。その仰せを聞いている端的には解釈も知性的理解も入りません。聞いているままが本願他力に端的に触れているのです。「こう理解した」とか「こう受け取っている」とかいう解釈じみたものは「たのむ一念」のところにはないのです。

それゆえ、掌が合わさり、仏法を聞くようになったことを押さえて、「ここまでお育て下さったのは如来様の本願力のおかげであり、私を浄土に連れて行って下さるのもこのお力である。ああ有難い」という場合は、信心の味わいとしては大変結構なのですが、「こうなった、ああなった。」

これは本願力のおかげである」と知的に理解し納得しただけのことならそれは信心とはいえますまい。いわんや「心臓が動く、血液が流れて下さる。これは我が力ではない、仏様に生かさせていただいている証

拠である。ああ有難い」と知的に理解し、理解したことを喜んでいながらそれは真宗の信心とは言えないでしょう。(了)

お便り

T・S氏からの便り

(T・Sさんの所感『木村無相師臨終法話注記』からの二月号よりの続きです。)

* * *

メクラの子は、目アキになつてからでなく、メクラのまま目アキの如来にただ念仏してと「手を引かれて」「生死しじゆうじ出離しゆり之境涯」無量光明土にまいらせていただけるのでしよう。……

人師といえども皆死んでしまふもので、結局は「自分ひとり」となることであるから、最終的には彼の土まで離れないお念仏様によって、不審な問題は世間出世間ともに念仏に聞思させていただくのが最高最上だと思えます。詳しくは念仏称え称え念仏そのものに聞くべし。

(木村無相さんのお手紙)

☆私思う。何も信心いただいで浄土へ行くのではない。信心も悟りもいただけない盲目と弥陀に信知されることが弥陀の信心をいただくことなのでしょう。人間の思いや知恵はまことあることなし。ただ本願念仏のみが生死を超えて永遠の智慧であると如来より信心をたまりたる善智識の言葉をただ信じるだけです。

「弥陀の願心が我が安心」。如来の願心をいただいた方々の言葉を信じよ。言葉はただ人によつてのみ通じる。

一蓮院に香樹院曰く
「お前もう、あちこち聞き歩かず家において念仏申していなされ」。

親鸞聖人いわく
「弥陀大悲の誓願を深く信ぜん人はみな

ねてもさめてもへだてなくなむあみだぶつをとなうべし」。

*

(佛智疑惑)

今さらわれわれが本願を疑おうと逆ぎやく謗闡提ぼうせんたいの本性、自性をチラチラ頭わそうと如来法蔵様におかれてはすでに十劫の昔にそれらの一切をつぶさに見抜き知り切つての上に「念仏往生」の誓願を建立無上殊

勝願とたてられたのであるから、言わば母親の乳房を赤ん坊が嘔かむようなもので、母親からしてみれば「やつとるやつとる」というようなもの「仏智疑惑」するほど「疑いの齒」「逆謗闡提の齒」が生えたよいうなもので、母親は乳房を嘔むようになった子供の成長を喜んでいられるかもしれませんよ。

(木村無相さんのお手紙)

☆私思う。もうここまで仏智に見通されれば何も言うことはありません。ただただ南無阿弥陀仏と念仏申すしかありません。我が助からぬと知れたところが南無阿弥陀仏の弥陀の願心なのです。弥陀には何も隠し事ができぬのです。

我は十劫の昔から無信人であり無仏法であり闡提せんたいでありその強固なことでは弥陀の本願と変わることはありません。故に弥陀は五劫の苦しみの思惟のもと本願念仏を悟られたのであります。汝のその謗法

闡提のナントモならない機に、どうにもならぬ機に、汝相応の弥陀願心の念仏の乳を飲めよと。「本願相応の念仏と機」

(続く)

*メクラという語は今では差別語とされませんが、当時の原文のまま引用しています。

〈遠方法話予定〉

○三月七日。名古屋市。高畑開法会館。十時より十二時半。法話・座談。
○三月十日。石川県小松市。興宗寺婦人会。一時半始。

○四月七日。福井別院。2組推進員研修会。十時より十二時半。法話・座談。

○五月三日。福井別院。2組推進員研修会。十時より十二時半。法話・座談。

○五月九日。名古屋市。高畑開法会館。十時より十二時半。法話・座談。

○六月十三日(午後)から十五日(午後)。福井別院。法話・座談

*詳しくは念佛寺にお尋ね下さい。

【念佛寺発行書籍】

- (一) 『木村無相・お念仏の便り』
- (二) 『松並松五郎念仏語録』
- (三) 『真宗の念仏と信心』
- (四) 『真宗教学の諸問題』
- (五) 『仏に遇うまで』

《春季彼岸会》

三月二十二日(木)
午後二時始まり